

Os Lusíadas 4

ルジアダシュ (訳第3回)

小林英夫・池上岑夫・松尾多希子

46

それらの舟は細身でながく
いとも軽快なできであった。
用いた帆はヤシの葉を
たくみに織ったむしろであった。
この有色人種はまさにかの
ファエトンが大胆とも粗忽とも
焼いた大地に与えた民だ。
ポーはそれを知り、ランベトッーサは嘆い
た。

47

身にまとうたのは木綿の布、
多色、白色、それに縞がら。
ぐるぐる巻きにしたものもいる、
粋いさにかかえたものもいる。
腰から上はまるはだか。
手にする武器はどすにだんびら。
ターバンをまいて漕ぎよせてくる。
ぬのいいアナフィルを吹きながら。

48

布をふり腕をふり、ルシタニア人に
待っててくれと合図をしている。
だがもう島々に碇泊すべく
速いへさきは傾きつつあった。
水夫も乗組員も働いていた、
さいごのしごとといった調子で。
帆をはずす、たかい帆げたがおろされる。
海は錨いかりに傷ついてしぶきをあげる。

49

まだ錨をおろしもあえぬに
異様な人々が綱をよじ登ってきた。

よろこぶ客人を至高の提督は
いんぎんに迎え入れた。
時をうつさず酒席を命じた。
人々はリュエウスのかもした液で
玻璃器を満たしたが、注がれたものを
ファエトンに焼かれた人々は遠慮しなかつ
た。

50

ゆかいに食べながらアラビア語で
尋ねるのであった、どこから来たか、
だれか、お国は、なにを探しにゆくのか、
どの海をわたってきたか、と。
たくましいルシタニア人は心得て
慎重な答えを返すのであった。
——「われらは泰西のポルトガル人で、
東洋の地を探しにゆくところだ。

51

およそ南極から北極にかけ
われらはすべての海をわたってきた。
アフリカの海岸を経巡ってきた。
さまざまの天と地を見てきた。
われらは敬愛する大王の臣下、
王命とあらばよろこび勇んで
大海はおろかアケロン湖にさえ
いさぎよく跳びこんでもみせよう。

52

われらは勅しきを奉じてインダスの
うるおす東洋の地を探しにゆくのだ。
王のためにはるばる海をわたるのだ、
みにくいアザラシしかかよぬ海を。
それはさておき、われらも知りたい、

真実の拒まれるふしもないならば、
あなた方はだれか、この土地はどこか、
インドについてなにか情報はないか。」

53

— 「わたしらは（と島人のひとりが答え
た）

掟といい氏といい、ここではよそ者です。
土民ときたら、掟もなければ理性もない
自然の造りっぱなしのやからですから。
わたしらにはアブラハムの子孫の
教えたりっぱな掟があります。
そのお方はいまや世界を統べています。
母はヘブライ人、父は異教徒でした。

54

わたしらの住むこの小島は
キロア、モンバサ、ソファラの海を
わたるわたしらすべてにとって
たしかな架け橋なのです。
それで必要から土地者同様
ここに住みつくよう努めました。
割ったところを申し上げれば、
小島の名はモサンビクです。

55

みなさんはインダス、イダスベ、灼熱の地
をめざし
はるばる海をわたってゆかれる以上、
この地で探針を求めてはいかが？
波路をかしこくみちびいてくれるようにと。
またこの土地から新鮮な食料を
なんなり取られたがいい、当地の
国司がみなさんに会い、みなさんの
必要とされる物資を提供されたがいい。」

56

こういってモーロは同勢をひきつれ
じぶんの舟にもどっていった。
提督や部下にしかるべき
敬意を表しつつ別れを告げて。

折しも玻璃の車のフォイボスは
明るい日輪を海中に封じこめた。
じぶんの憩うあいだ妹に
世界を照らす役目をゆだねながら。

57

疲れた船隊に夜はふけていった、
想い設けぬ異様な悦びにひたって、
ひごろ待ちわびた遠い国の
しらせを手に入れることができたとして。
人々はおのがじし見慣れぬ人間や
風習もあればあるものと考えた。
そしてなんとまあ邪教の信徒が
世にはびこっているものかと思った。

58

明るい月かげはネプトゥーヌスの
銀波の上にかがやいていた。
星は満天をうずめていた、
ヒナギクに掩われた野原さながら。
狂暴な風はとおくの暗い
ほこらのなかで休んでいた。
だが艦隊の乗組員は見張りを立てていた、
ながいあいだの仕来たりとして。

59

しかしはだらな暁の女神が
めざめた明るいヒュペリオンの子に
紅い入口をひらいて青空に
美しい髪をなびかせたとたん、
全艦隊は旗飾りをほどこし
目もあざやかな天幕を張った、
舟出してきた島々の国司を
祝典をもって迎えるために。

60

かれらは悦ばしげに渡ってきた、
ルシタニアの快速船を見ようとて。
新鮮な食料を持参し、心に思うよう、
こいつらはカスピ海沿岸の住民で、
アジアの国々を攻め取ろうと

到来したが、運命のおきてで
コンスタンティノスの帝国を奪った
鬼畜のごときやからにちがいないと。

61

モーロの国司とその一行を
提督は悦ばしげに出迎えて、
あらかじめ用意してきた
豪華な品々をかれらに贈った。
あまい砂糖漬を、もえる酒を、
のむと陽気になる禁断の酒。
モーロはすべてをこころよく受けとり、
それにもましてこころよく飲んで食らった。

62

ルーソの舟人は舟具の上で
あっけに取られた表情だ、
異様な動作や風俗や
混み入ったやばんな言語に。
抜け自ないモーロのほうでも途方にくれた、
肌の色、服装、堂々たる艦隊をみて。
そしてあれやこれやと尋ねてきた、
もしヤトルコから来たのではないか、と。

63

かれはまた見たいものだといった、
あなた方の掟、戒律、信心の書物を。
じぶんらのものと比べてみたい、
もしヤキリストやらの書ではないか、と。
そしてなにもかも見てくれようと
提督に乞うた、敵とたたかうときに
用いる威力ある武器の実演を
拝見できたらさしてほしい、と。

64

勇敢な提督は答えていうよう、
むずかしい言葉を解する者を通じて
——「閣下よ、申し上げます、じぶん
のこと、
掟のこと、たずさえた武器のことを。
わたくしはトルコのけがらわしい民の

国の者でも血を引く者でもない、
戦い好きなヨーロッパの者であり、
名だたるインドの国々を探しているのだ。

65

わたしどもの教えは、目に見えるものも
見えぬものもその力に従うお方の教えなの
だ。
そのお方は半球ぜんたいをお造りになった。
生き物をも木石をもお造りになった。
そのお方は辱しめと雑言に堪えられ、
忍びがたい不正の死をこうむられた。
あげくに天から地におりられた、
必滅者らを天に昇らせるために。

66

このやんごとなき神人の書物を
あなたは乞われるが、持参しなかった。
なぜなら暗唱せねばならぬことを
紙に書いて運ぶいわれはないからだ。
武器を見たいとの仰せであるが、
ご希望はかなえて差し上げましょう。
友人として見られたい、よもや敵として
見るおつもりはありますまいから。」

67

こう述べて、忠実な部下らに
武器類を見せるよう命じた。
物の具一式、きらめく胸甲、
精巧なかたびら、鋭利な太刀、
とりどりの絵のかいてある楯、
砲丸、純正はがねのらっば銃、
弓および矢を収めるえびら、
とがった十字矛、おそろしの槍。

68

持ち出されたのは火つけ爆弾、
きけんきわまる火薬筒、
ただしヴルカーヌスの連中が
臼砲を放つことは許さなかった。
なぜなら真の勇者というものは

臆病小心者のあいだでは
力の限りをひけらかしはしないから。
牝羊のあいだでライオンぶるはおとなげな
し。

69

けれどもモーロがここでみとめたもの
注意ぶかい目で見たいっさいから
抜きがたい憎しみが残された。
ほかでもない、よからぬたくらみだ。
それを顔にも素振りにも示さず
ほほえみとうれしげな様子とで
一行を丁重にもてなそうと決意する、
本心を示せる時期がくるまでは。

70

提督はかれに擦針を請うた、
インドにつれていってくれるような、
そのしごとのための骨折りには
ぞんぶんの褒賞をとらせるといった。
モーロは提供を約したが、
腹のなかには毒を秘めていた、
もしできたらその日のうちにも
擦針どころか死をくれてやろうと。

71

ダビデの子孫が教えたもうた
真理の使徒であると知ったとき
たちまちかれが外人に抱いた
憎しみと悪意はそんなにも大きかった。
おお、いかなる分別も達したことなき
かの久遠なるものの秘密よ、
かれの愛したもうたものにとって
不実の敵を欠かさぬとは！

72

いかさまモーロは同勢をひきつれ
ようやく船団を辞していった。
心にもなくおおげょうなあいさつをし
一同に愛嬌をふりまきながら。
小舟はネプトゥーヌスの汐路を

まっすぐ切り進んだ。上陸したモーロは
家来たちにもやうやくしく迎えられ
勝手知った住みかへもどっていった。

73

明るい天の宮居から大ターバイ人は
(かれは父のももから生まれたのだが)
ルシタニア人の一行がモーロにとって
やっかいな存在だと見てとるや
かれらを一網打尽にしてくれる
よこしまなばかりごとを思いめぐらし
心のうちであれこれ打ち案じつつ
このような独り言をいうのであった。

74

「これは運命神の一存によるのだ、
かくも大きなかくも名だたる勝利を
戦い好きなインド人にたいして
ポルトガル人が収めるというのが。
やんごとなき父神の息子のわしが、
武勇のほまれいと高いというに、
運命神が余人をひいきして、そのため
わしの名がかげるのを我慢せよとは！

75

かつて神々はこの地方において
フィリッポスの息子が権力をおさめ
たけきマルスとその足械のもとに
全国を平定するのを望んだのであった。
しかし運命神がかくも弱小な民族に
大きな胆力と機略をさずけたけっか、
わしが偉大なマケドニア王やローマ帝とと
もに
ルシタニア人の名に蹴押されていいとは！

76

そうはやらせん、というのもかの提督が
到着せぬうちにはかりごとを
ちみつ周到にめぐらしておき
東邦諸国を見せてはやるまいから。
わしは大地におりたち、モーロの民の

怒れる胸をたきつけてくれよう、
なぜなら好機をつかむものこそ
目標に直進するであろうから。」

77

こういって気がふれたように怒って
アフリカの地におりていった。
人間の姿と顔をよそおいながら
なだかいブラソ岬さして歩いていった。
そして計略をいっそう巧みに織るべく
モサンビケにその人ありと知られた
首長から尊敬される老いた賢者の
モーロの姿に身をやつしたのであった。

78

かれははかりごとにつごうのいい
汐時に出かけていって首長に語った。
さいきん到来した奴ばらは
海賊の手合いにはかならないと。
また海辺の住民のあいだで
もっぱらのうわさによれば、かれらは
平和な取引きと称して入港した
旅がらすどもに略奪されたと。

79

「なお知らせよ、とかれにいった、わしが
この
残忍なキリシタンらについて耳にしたこと
を、
やつらは略奪と放火をこれ事とし
海という海で海賊をはたらいておる。
そして長年かかって練りあげた
計略をもってきた。その下心は
われらを殺戮すること、略奪すること、
女子供を引っ捕えることなのだ。

80

わしはまた知っておる、提督が
あさまだき海から殺倒する
つもりであるのを、手下を引きつけて。
疑心暗鬼とはまさにこのこと。

そちも部下をつれてゆくがよい。
物蔭にひそんで待ち伏せるのだ。
なぜならうかつに出てくる人間は
たやすくわなにかかろうからな。

81

これでもなおかつ奴ばらが
絶滅されんようだったら、
こんどこそちも満足するような
秘策を腹のなかで考えておる。
かれらに命じて探針を出してやれ、
瞞着はお手のもの、いとも細心に
やつらをつれ込み、たたいてばらして
殺してせん滅してしまうのだ。」

82

これらの言葉をいいおえるや、
そうしたことに老練なモーロは
バッコスの首に腕を投げかけ
大いに忠告を感謝した。
さっそく取るものも取りあえず
戦闘準備にとりかかった、
ポルトガル人の求める水が
あかい血汐にかわるようにと。

83

そのうえ計略の周到を期して
探針として船に送るモーロを探した。
悪事にかけては巧妙で敏腕で
一大事を託するにたるような。
その男にいった、ルシタニア人についてい
き、
どこそこの岸、どこそこの海に到り、
たとえそこから遁れてもその先では
ぜったい立ち上がれぬようにしろと。

84

すでに燃えたアポロの光線は
ナバテの山々を訪れていた。
折しもガマは部下をひきつれ
海路から上陸と決めていた。

舟人は計略を承知してか
用心おさおさ怠らなかつた。
それは推測するにたくはない。
遠きおもんばかりあれば近き憂いなしとや
ら。

85

かれはまた陸地に人を派して
拷針をまえて得ようとしたが
回答はけんもほろろのていであった。
これは想いも寄らぬことであつた。
これといい、不実な敵を信ずるもの
の心得ちがいをわきまえるがゆえに、
もってきた三隻のボートに乗って
用心に用心をかきさねていった。

86

モーロらはほしがる水をやるまいと
海辺をあちこち歩いている。
腕に楯と投槍をもつものもあり、
曲った弓と毒矢をもつものもあり、
兵士らの出現を待ちうけていた。
おおかたは蔭れ場に身をひそめ、
弱勢と見せかけて小数を
おとりに前線に配していた。

87

砂地の白浜を歩いている、
戦い好きのモーロらが、草楯と
けんものな槍をしごきながら、
ポルトガル人をけしかけながら。
おうような民は犬どもが牙むいて
近づくのを意に介さない。
いとも身がるに地上にとびおり
だれが一番槍かもわからない。

88

あたかも血なまぐさい競技場で
だて男が意中の美女をみとめ
牡牛をひきよせ、前にはだかり
跳び、走り、口笛し、合図し、どなるや

そのとたんどうもうな野獣は
角ある顔を前に下げつつ
吠えたと、突き進み、両眼をとじて
のしかかかって、傷つけて、殺して、地面に
たたきつける。

89

見よ、ボートのなかから火の手があがる、
おそるべき砲塔のあいだから、
鉛のたまは殺し、怒号はおどす。
あおりをくって大気はこだまし、ビューと
鳴る。
モーロらの心はおじけづいた。
大きな恐怖が血を凍らせた。
伏兵はおそれて逃げだし、
吹きさらしの大胆者は死んでゆく。

90

ポルトガルの民はこれにあきたらず
勝ちに乗じて破壊し殺りくする。
周壁もなく防備もない村落を
砲撃し、放火し、破壊する。
出撃はモーロにとって重荷となった、
もっとやすくつくと思えたのだが。
尻のおもい老人や児持ちの母は
戦いを痛罵し呪っている。

91

あわてふためいて逃げだすモーロは
矢を射かけるがとどかない。
石を、木っ端を、碎石を投げる。
死にもの狂いが武器を供した。
島をすて全財産をすてて
いのちからがら本土に逃げる。
わずかの距離で島をとりまく
海のはざまを越えてゆく。

92

われがちに丸木舟で走り去るものもあり
けんめいに泳ぎわたるものもある。
あるものは波のうねりにおぼれ死に、

あるものは海水を呑んだそばから吐きだす。
つるべ打ちの砲撃に蛮人どもの
きゃしゃな小舟は木っ端みじんだ。
このようにしてポルトガル人はついに
敵の不実なわるだくみを罰するのだ。

93

かれらはいせんして艦隊にもどった。
戦利品を山とかかえて。
そして抵抗にも防禦にもあわずに
飲料水を思うぞんぶん求めにゆく。
モーロの民はじだんだふんだ、
これまでになく憎しみに燃えて。
そして仕返しどころが大損害をみて
二段目の計略に望みをおいた。

94

よこしまな土地の国司は恐縮して
講和を締結すべく人を派してきた。
講和をよそおい戦いを送るとは
ルシタニア人は知るよしもなかった。
なぜなら約束されたいかさま 針は
わるだくみを腹いっぱい秘めており
取りきめた講和のしるしとして
かれらを死地に導くべく送られたからだ。

95

提督はそろそろ既定の航路に
もどるべき汐時と見てとったので
— 念願のインダスをめざすには
天候も風向きも申し分ないので —
やってきた擦針を迎え入れ
(提督にねんごろにもてなされ)
使者に答えて、抜け目なく
風いっぱい帆をあげるよう命じた。

96

こうして勇ましい艦隊はともづなを解き
アンフィトリスの波頭を切っていた、
ネレウスのむすめらを従えて。
忠実で快活で優しい道づれ。

提督はモーロの織りなす
わるだくみにいっこう気付かず
過ぎゆく海岸やインド全域について
かれから広汎な情報をえたのであった。

97

しかし腹ぐろいパッカスの教えた
計略をこころえているモーロは
死や捕囚のあらたな危難を
インドに着かぬうちに用意する。
インドの港々について語り、
質問にはなんなりと逐一答えた。
つよき人々はその言をまに受け
怪しむ様子もなかったのだ。

98

そのうえシノンがフリュギア人をだました
いかさまな考えでかれにいった。
ちかくに島がひとつあり、むかしながらの
キリシタンが住んでいると。
万事にぬかりのない提督も
このしらせには大満悦。
たんまり贈物してかれに乞うた、
その民のいる土地に案内するよう。

99

いかさまモーロがたくらんだことは
正直なキリシタンの願いそのままであった。
その島はいやらしいマホメットを奉ずる
よからぬ民の所有に帰していたのだ。
そこに策と死を思いみた。
この島は権力でも武力でも数等
モサンビケよりまさっていたのだ。
名をキロアといい、海内に名をえていた。

100

船隊はよろこび勇んでそこへ向かった。
しかしキュテラで崇められる女神は
それが正路をはずれており
不測の死を招きにゆくと見るや
遠隔の地で愛する民が

破滅するのをこころよく思わず
いかさま探針のみちびく方角から
逆風をもってそれしてしまつた。

101

しかしよこしまなモーロは計画が
想いどおりに運ばないので
あくまで初志を貫こうと
ほかの悪業をはかりつつ
かれにいった、汐に押されて
あらぬ方へきてしまったが
近くにべつの島があり、その住民は
キリシタンとモーロとが半々だと。

102

これらの言葉はいつわりであった。
ほかならぬ上からの敵命であった。
そこにはキリストの民はおらず
マホメットを崇める連中が住んでいた。
モーロを信じきっていた提督は
帆を返して島へと命じた。
けれども守護の女神の気に入らず、
埠頭をこえず、沖にとどまった。

103

その島は本土にちかく
せまい海峡がそれを分けていた。
ひとつの都市がそこにあり、
海と向きあつてのぞかれた。
壮麗な建物でできており、
とおく沖からもそれとわかつた。
統治者は高齢の王であった。
島と都市の名をモンバサという。

[注]

お断り：そのごの調べにより、既出個処にもさかのぼって補注を加えることもある。なお
今後はなるべく注の根拠を示すことにする。翻訳の底本としては Luis de Camões,
Obra completa (Biblioteca Luso-Brasileira), 1963 を用い、ほか
に Hernani Cidade による全集本 (tom. IV-V), 2 ed. 1956 および、
Imprensa Nacional de Lisboa 刊行の Os Lusíadas de Luis de
Camoões. Edição Nacional を必要に応じて参照した。注のためにはそれらに

104

その島についた提督の
きげんは上乘であつた、というのも
いかさま 針が語つたように
受洗の民に会える思いで。
ほれ、本土から王の詔勅をもつた
ボートがくる、到来の人間を先刻承知だ、
もうひとりのモーロに変装した
バッカスがとうに告げておいたので。

105

もたらした詔勅は友好的であつた。
だが下には毒がかくされていた、
たくらみが露見に及んだみぎり
本心は敵意に充ちていたから。
おお、重大きわまる危険よ、
おお、定めなき人生の行路よ、
ひとが望みを託するその場所で
人生はなんと頼りにならぬことか！

106

海は苦難と損傷に充ち
しきりに死地が顔をだす。
陸には戦いと謀略があふれ
いまわしい窮乏がある。
もろき人間はどこで迎えられよう、
みじかい人生はどこに安全をえよう、
微小な地上の虫けらに怒つて
晴朗天が矛をとることのないような？

付せられたもの、および Augusto Epifânio de Silva Dias の注釈本 (2 toms. 2 ed. mehorada 1916-18) — 借用を許された上智大学に感謝する — の詳細刻明な注、ならびに仏訳者 Roger Bismut のきわめて良心的な注 (Les Lusíades, nouvelle éd., Lisbonne, 1961) から多くを学んだ。ほかにギリシャ神話にかんしては高津春繁編、ギリシア・ローマ神話辞典、岩波書店、1960、および Pierre Grimal, Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine, 3 éd. 1963, The Oxford Classical Dictionary (by M. Cary etc.), 1949, Everyman's Smaller Classical Dictionary (by William Smith, revised by H. E. Blakeney and J. Warrington), 1956, その他にも関連していちばん参照したのは Dizionario Enciclopedico Italiano である。

27. 5-6 日の長い処も/みじかい処も見てきた — as partes vendo/ Onde o dia é comprido e onde breve. Gama は 1497 年 7 月 8 日にリスボンを発し、3 週間後にカーボ・ヴェルデに達しており、前地では昼間が 15 時間、後地では 12 時間であった。Bismut は、この二つを比較して日が長い短いとするのは納得がいまいかぬという。なぜなら Gama は北の温帯 (リスボン) を盛夏に発し、南の温帯に 11 月初旬、すなわち当地の夏の始めに入っており、南北でおなじく長日を経験しているからである。そこで次のような解釈も成りたつという：二つの地点において、同一時期において、その一では日が長く、他ではみじかいと。

28. 3-4 あかねさす日輪の登場をみる大海 — o mar que vê do Sol a roxa entrada. インド洋をさす (Cidade).

28. 5 きびしい冬 — o duro Inverno. 冬を寒い季節と定義すれば、Gama が南半球を通過したのは冬ではなくて盛夏である。すなわちかれは 1497 年 11 月 22 日に喜望峯をめぐり、翌年の 3 月 1 日にモンバサに付いている (Ed. Nac. しかし「ガマ・インド航海記」(大航海時代叢書 I, 野々山ミナコ訳, p. 362-3) によれば 3 月 2 日)。そのころはポルトガルの 5 月から 7 月にいたる季節に相当する。詩人は本国の人々の季節感を考慮に入れて冬と称したものと思われる (Cidade)。なお J. M. Rodrigues は、この些細な誤りもじつはユピテルが神々の同情をひくための口車であろうと、うがった解釈を下している (cf. Bismut)。

30. 5 バッカス — O padre Baco. 「バックス翁」と訂正。ギリシャ名に二つあり、一はディオニュソス (Dionýsos), 他はバックス (Bákkhos)。後者はおそらく小アジア語由来。これからラテン形 Bacchus が出た。ローマでは、古来のぶどう栽培と田畑豊穡の神である Liber Pater (「放徒なおやじ」の意) と同定された。これは固有の神話をもたず、ディオニュソスの神話をもらい受けている。しかしこれまたはなはだ混乱している。というのはギリシャ以外の (トラキア, マケドニア, 小アジア) 要素をたくさん交えているからだ。ディオニュソスはカドモスとハルモニアとの娘セメレとゼウスとの子、ゼウスに愛されたセメレはヘラにそそのかされ、ゼウスがヘラに近づくときの姿そのままに來るよう乞うた。ゼウスはそこで戦車にのり電光と雷鳴を伴って彼女の臥床に近づいた。セメレは電光に目を射られ雷霆にあたって焼け死んだが、そのとき胎内にあった 6 か月の幼児をゼウスはじぶんのもものなかに縫いこんだ。月みちてディオニュソスが無事生まれると、

ゼウスはわが子の養育をヘルメスにたのんだ。ヘルメスの尽力もむなしく、またヘラに見付かり、ついにはゼウスは (Grimal による。高津ではヘルメス) ディオニュソスを仔鹿にかえてヘラの目をあざむき、ニュサ (cf. 31. 7) に送り、そこのニンフたちに育てさせた。かれは長ずるに及んでぶどうの樹とぶどう酒の醸造法を発見した。しかしヘラは怒ってかれの気を狂わせてしまった。かれは狂ったままエジプトやシリアをさまよひ、フリュギアに入ってそこの女神キュベレに歓待されて正気にもどされた。そのゴトラキアにゆくとその王リュクルゴスから虐待され、あやうく投獄されそうになるのを、ネレイスのテティス (cf. 16. 5) の庇護のもとへ遁れた。彼女はかれに海底のかくれがを供した。そのごディオニュソスは狂乱の従者らをつれて、インドにいたるアジアを征服したことになるが、これはアレクサンドロス王のインド征服以後に加えられた話である。ギリシャにもどったディオニュソスは母の生国ボエオティアにゆく。そこのテーバイは当時カドモスのあとをペンテウスが治めていたが、かれが狂信者ども (Bacchanales) を引きつれて来、ことに女たちが狂気になって騒ぐのをきらい弾圧した。要するにディオニュソスはぶどう収穫の祭神、酒の神、女性の熱狂的崇拜の神として知られ、文芸のなかでそのように取り扱われている。本詩では、かれはポルトガル人航海者のであろうかすかすの困難や危険を象徴している。

31. 2 イスパンア — Espanha. Camões と同時代の文学者の間ではこの語は、ローマの伝統にしたがって、イベリア半島ぜんたいをさしていた (Epifanio, p. 24)。

31. 4 ドリス — Dōris (Dōris). 大洋神オケアノスとテティスの娘で、海神ネレウスの妻、ふたりの間に 50 人の娘があり、ネレイス (Nērēis, 複数はネレイデス Nērēides) といわれる。ラテン詩人はこの名をもって海を意味せしめた (例. Verg., Buc. X 5)。 (Epifanio, p. 24)。

31. 6 わが古来の名声 — a fama antiga. バッコスがインドにいたるまでのアジアを征服したこと。 (cf. 30. 5 バッカスへの注)

31. 8 ニュサ — Nisa (Nīsa). バッカスを育てたニンフ (cf. 30. 5 バッカスへの注) のひとりの名から、その土地の名となった。この地名をもつ町は古代においてはなほは多く、ギリシャだけでもテッサリア、エウボエア、ボエオティア、ナクソス島、その他マケドニアに、またギリシャ以外ではリビア、エジプト、アラビア、インド等にある。古典地理学によれば、インドのニュサはメロス山附近の町であり、その住民はみずからバッコス移民の後えいだと称しているという。この語の語源は、Dionysos の名を dio-nys-os と分解したその中間の意味不明の nys に由来するらしい (高津, Bismut. Diz. Enz. It.)。

32. 1 インダス — o Indo. (lat. Indus, gr. Indós, sans. Sindhu) この語はサンスクリットでは「川」を意味する普通名詞だが、とくにパンジャブ地方をうるおす大河にたいする固有名詞となり、ひいてはインド全域を示すようになった (cf. MacDonell, Practical Sanskrit Dict.). したがってインダス河からインド全域への意味拡大は泰西人に由来するというより、すでに原地でおこなわれていた慣用にしたがったものと見られよう。

32. 3 パルナソス — Parnaso (lat. Parnasus または Parnassus, gr. Parnasós または Parnassós). コリント湾の北方にそびえ、ピンドス山脈の南東にのびたその支脈中の山塊であって (その最高峰 Liakura は海拔 2457m. Le Grand Larousse および The Times Atlas of The World,

comprehensive ed. 1967 による), 古代においてアポロとディオニュソスにとって神聖な山とされ, またムーサイのすみかとされた。したがって古来, 詩歌, 詩的感興, 詩的創作などを象徴する。

33. 1 美しいヴェヌス — *Vénus bela*. ローマの女神, ギリシャのアフロディテ (*Aphrodītē*) と同一視される。愛, 美, 豊穡の女神であり, かつまた航海や戦争の女神でもある。一説によれば水泡 (*gr. aphros*) から生まれ, 西風ゼフェロスによってキュテラに, ついでキュプロスに運ばれた。彼女は醜怪な鍛冶の神ヘパイストス (ウルカーヌス) と結婚したが, 軍神アレス (マルス) と情を通じた。Vergilius にあってヴェヌスがローマ人の祖アエネアスの保護者であったように, Camões は本詩においてヴェヌスをポルトガル人の保護者として描いている。

33. 5 ティンギスの地 — *a terra Tingitana*. 北アフリカ最古の都市の一つである Tanger は, ギリシャ人やローマ人の間では *Tingis* として知られていた。ポルトガル人は 1471 年にこれをモローから奪取し, のち 1662 年に *Brigança* 家の Catarina 姫が Charles II に嫁するとき婚資としてイングランドにゆずり渡すまでの 2 百余年の間, これをその支配下においてきた。タンジエルの征服は, 本節でいうようにポルトガル人の武勇によるものではない。ポルトガル人のアルジラ攻略の報に接したタンジエル市民が急におじけつき, 町を破壊して全財産を持ち去り, 戦わずに町をポルトガル人に明け渡したにすぎないのだ (D. Peres 監修, *História de Portugal*, III, p. 449)。

33. 7-8 それから国語に …… ラテン語そのものなのだ — *E na lingua, na qual quando imagina, / Com pouca corrupção crê que é a latina*. ロマンズ語がラテン語の発達したものであることは, すでにルネッサンスの学者たちが認めていた (Andre de Resende (1573 死) は Vincentius の注のなかで書いている: *in nostra lingua, quae pene latina est*) (Epifânio, p. 26)。

34. 1 キュテラの女神 — *Citereia*. これは *Cythera* (*gr. Kÿthera*) の形容詞女性形, ペロポネソスの南東にある島の名。アフロディテは誕生ののちこの島に上陸したと伝えられ, そのため彼女を祭った有名な神殿がここに建てられた。かくして彼女はキュテラと称せられる (*Cidade*, 高津)。

34. 2 パルカラ — *as Parcas*. (*lat. Parca, pl. Parcae*) ローマの運命の女神。ギリシャのモイラ (*MOîra, pl. MOîrai*) と同定される。モイラとはがららい生命, 幸運, 不幸などの「割り当て」の意であって, このような抽象的観念のちに神格化されて女神となった。ヘシオドスでは 3 人おり, それぞれ運命の糸を「紡ぐもの」(*Klotho*), 紡がれた糸を各人に「割り当てるもの」(*Lakheis*), その糸を「断つもの」(*Atropos*) と呼ばれる。(*Grimal*, 高津)

34. 3-4 戦い好きの民が …… あがめられる — 「明眸の女神」(*a clara Deia*) とはヴェヌスのこと。ヴェヌスは戦争の女神でもある (cf. 33. 1 の注)。

35. 1-6 あたかも …… 煮えくりかえる — この個処は次の詩句をまねたもの:

Vergilius, *Aeneis*, IV 442-444 (cf. *Bismut*):

*Alpini boreae nunc hinc nunc flatibus illinc eruere
inter se certant; it stridor et altae consternunt*

terram concusso stipite frondes.

アルプスおろしの朔風がここかしこから

吹きあれて(樅の古木を)根こそぎしようと競うとみれば、風音すさまじく

幹ゆれて高い枝葉もろとももんどり打って地に倒れる。

35. 1 南風 — Austro (lat. Auster). ローマの南風(げんみつには南西風。cf. Smaller Clas. Dic.)の神で、ギリシャのノトス(Notos)にあたる。湿気をふくんだ熱風をもたらす。北風や西風のように人格化されることはほとんどない。

(Grimal)

35. 1 北風 — Bóreas (lat. Boreas, gr. Boréās). 北風の神。あかつきの神エオス(Eōs)と星神アストライオス(Astraios)との子。西風ゼフィロス(Zéphýros), 南風ノトスの兄弟, トラキアに住む。そこはギリシャにとってとくべつ寒い地方だから(Grimal)。

36. 3 むかしの愛のえにしにより — porque o amor antigo o obri-gava. ヴェヌスがかつてマルスと情を通じたことをさす(cf. 33. 1の注)。

37. 1 金剛のかぶと — o elmo de diamante. このdiamante はダイヤモンドの意味ではなく、「かたい鋼でできた」(de rijo aço)を意味する lat. adamantius からきている(Bismut, Ed. nacional)。訳語の「金剛」もその意を汲んだもの(金剛とは「金属中もつとも剛なるもの」の意という。cf. 広辞苑)。

37. 7 アポロ — Apolo (lat. Apollo, gr. Apóllōn). ゼウスとレト(Lētó)との子。アルテミス(Artemis)(ローマではDianaと同定される)とふたご兄弟。デロス島に生まれた。音楽, 医術, 弓術, 予言, 家畜の神。また光明の神としてフォイボス(Phoîbos 「輝くもの」)の呼称をもち, ときに太陽と同定される(高津)。cf. 47の注。

38. 4 他の半球 — outro Hemisfério. 東半球の意(Ed. nac.)。